

コーチの相互作用行動と子どもの認知の関係についての事例研究：
仙台大学柔道塾を対象として

川戸 湧也¹⁾

南條 充寿¹⁾

南條 和恵¹⁾

1) 仙台大学体育学部

学会等報告

コーチの相互作用行動と子どもの認知の関係についての事例研究： 仙台大学柔道塾を対象として

川戸 湧也¹⁾ 南條 充寿¹⁾ 南條 和恵¹⁾

1) 仙台大学体育学部

Kawato Yuya¹⁾, Nanjo Mitsutoshi¹⁾, Nanjo Kazue¹⁾ : Case study of the relationship between coach's interaction and children's cognition : For Sendai University judo club. : Bulletin of Sendai University, 51 (1) : 19-23, September, 2019.

1) Sendai University Faculty of Sports Science

KEYWORD Systematic Observation method, Interaction Recording method, 4 major Teacher Behavior

キーワード 組織的観察法, 相互作用記録法, 四大教師行動

I. 緒言

スポーツ教育学において、子どもたち（学習者）に対する教師^{註1)}の働きかけは従前から重要視されている。運動が得意な子どもであれば放っておいても自ら課題に取り組むかもしれないが、運動が苦手な子どもは自発的に運動は行わないだろう。深見（2010）は、たとえ失敗しても温かく受け入れられるような雰囲気を作り出すことが重要であると述べており、これを構築するものが子どもに対する教師の働きかけ、つまり“相互作用”であるとしている。相互作用では、教師と子どもの間で双方向的に情報が交わされる（高橋・中井，2003）。具体的には、発問、励まし、フィードバック（肯定・矯正・否定）がこれに該当する。そして、肯定的フィードバックや矯正のフィードバック、励ましは子どもに認知されやすく、これらを与えることが子どもの学びにとっては重要であるとされている（高橋ほか，1989）。これらはいずれも体育授業内の活動についての論説であるが、スポーツを媒介とした教育的活動という点でスポーツ

クラブにおける活動とも共通点がある。特に子どもを対象としたスポーツクラブでの指導においては、体育授業と同様に相互作用行動は、子どもたちの学びにとって重要な要素になりうると推察できる。

上述した体育授業を対象とした研究成果の影響もあってか、今や様々なスポーツ活動において選手に対して賞賛する相互作用が散見されるようになってきた。多くの指導者が“よりよい”コーチングのためには肯定的・矯正のフィードバックが効果的であることを経験的に理解していると推察できる。

しかしながら、体育授業以外のスポーツ活動場面における相互作用行動に関する研究の蓄積は多くはない。その点で、教師の相互作用行動を子どもがどの程度認知しているか、教師の相互作用行動から学びを得ているかについては検討の余地がある。そこで本研究では仙台大学柔道塾を対象として、事例的に教師の相互作用行動を分析するとともに、それらの相互作用を子どもたちがどの程度認識し学びを得ているかを明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 研究方法

本研究では2つの課題に取り組んだ。すなわち、「①. 教師の相互作用行動を分析すること」と「②. 子どもの相互作用認知を分析すること」であった。

表 1. 課題①の対象者の属性

教師	性別	職業	段位
教師A	男	大学教員	七段
教師B	男	大学生 (4年次)	参段
教師C	女	大学生 (4年次)	参段
教師D	男	大学生 (3年次)	弐段
教師E	女	大学生 (2年次)	弐段

課題②の対象者は、「仙台大学柔道塾」に在籍し、日頃から稽古に参加している小学生2名であった。対象の選定に際して、対象者およびその保護者に対して、本研究の趣旨を书面および口頭で説明した。そのうえで研究に参加することへの同意を得られた子どものみを対象として選定した。なお、対象者にはいつでも本研究への協力を辞退できること、辞退によっていかなる不利益も被らないこと、同意をした後でもその同意を撤回できることを説明した。

2. 調査方法と収集するデータ

課題①について、ここで収集するデータは「対象者の発話内容」および「指導場面全体の映像」であった。「対象者の発話内容」について、図1に示す通り、対象者には内側にICレコーダーを設置した柔道衣を着用させ、指導中すべての

1. 対象

課題①の対象について述べる。ここでの対象は、「仙台大学柔道塾」において平素から指導を担当している大学教員1名ならびに大学生4名とした(表1)。

発話を録音した。録音した音声データはすべて文字起こししてテキストデータを作成した。「指導場面全体の映像」について、図2に示した位置から指導場面全体の映像を撮影した。撮影にはデジタルビデオカメラ (SONY社製:HDR-CX590V) を用いた。撮影した映像と音声データおよびテキストデータを照らし合わせることで、どのような場面で、だれが、だれに対して相互作用行動を行ったかを記録・分析した。

課題②について、対象者に対して無記名のアンケートを実施した。質問項目は、形成的授業評価(高橋ほか, 2003)を参考に作成・実施した。質問項目としては、「誰に声をかけられましたか」、「それはどのような内容でしたか。覚えていることを記入してください」の2点であった。

なお、これら2つの調査は2018年11月29日(木)に実施した。



図 1. 発話内容の記録方法



図 2. 撮影場所とその方法

Ⅲ. 結果と考察

1. 教師の相互作用行動について

課題1について、対象者の相互作用行動数は表2に示す通りであった。これをみると、調査当日の相互作用行動の総数は352回であった。「仙台大学柔道塾」の練習時間は2時間であったことから、1分あたり約2.9回の相互作用行動が行われたことが示された。

相互作用行動を項目別に検討してみる。「発問」について、これを活用していたのは、教師D

と教師Eの2名のみであった。回数も2人合わせて3回と非常に少ないことが示された。発問は、教師の言語的方法の中で最も重要なものの1つに数えられる(シーデントップ, 1988)。発問を用いることで、問題解決的にもまた探究的にも学習指導の核心に触れることができる。しかしながら、本研究の分析結果を見る限り、問題解決的・探究的な指導法は実施されておらず、教師から子どもに対する直接的な指導が中心となっていたことが確認できた。

表2. 相互作用行動の内訳

	発問	肯定		フィードバック				励まし	合計	
		一般	具体	矯正		否定				
				一般	具体	一般	具体			
教師	A	0	29	0	12	2	0	0	3	46
	B	0	16	0	42	5	0	0	10	73
	C	0	14	0	32	0	0	0	6	52
	D	1	4	0	69	1	0	0	5	80
	E	2	34	0	54	6	0	0	5	101
総数	3	97	0	209	14	0	0	29	352	

「フィードバック」について、肯定的フィードバックおよび矯正的フィードバックは全ての教師が活用していた。否定的フィードバックは確認できなかった。さらにこれらの内訳をみると、すべての肯定的フィードバックは「一般的」なフィードバックであった。つまり、教師は子ども達の行動や思考に対して賞賛をしているものの、具体的に「何が良かったのか」という情報を与えてはいなかったことが示された。矯正的フィードバックは、223回確認できた。これはフィードバックを含むすべての相互作用行動の中で最も多かった。「一般的」なフィードバックは209回、「具体的」なフィードバックは14回であった。

「励まし」について、フィードバック同様にすべての教師がこれを活用していた。最も多かったのは教師Bの10回であった。フィードバックは、抽象的な情報よりもより具体的な内容を提示することが重要となる(シーデントップ, 1988)。あるいは、価値的内容をもったフィードバック回数を増やすことも重要となる。その観点から本研究の結果をみると、いずれのフィー

ドバックも「一般」、つまり抽象的なフィードバックが多く行われていた。本研究ではフィードバックの価値的内容まで踏み込んだ分析は実施していないが、より具体的な情報をもったフィードバックへ改善できる余地が示された。

2. 子どもの相互作用認知について

上述の通り実施された教師たちの相互作用行動であったが、このうち、「誰から」の相互作用を「どのように」受け止めたのであるかを検討した。子ども達にとって印象に残ったと考えられる相互作用行動は、表3のとおりであった。これをみると、最も多く子どもの印象に残ったとされたのは教師Dのであった。教師Dの相互作用行動数は80回であり、教師のなかでは2番目に多い数であった。一方で相互作用行動数が最も多かった教師Eは4名からは「最も印象に残った」と回答されていた。これをみると、相互作用行動の多いからといって必ずしも子ども達は認識しないということが示唆された。大学教員である教師Aからの声かけを「最も印象に残った」と回答してい

た子どもは3名にとどまった。これは、年齢が大きい離れた大学教員（教師A）よりも比較的年齢の近い学生（教師B～E）の声かけを受け止めた結果であると推察できる。

表3. 子ども達の印象に残った相互作用行動の具体例とその種類

教師	回答数 (n=22)	相互作用行動の具体例
A	3	<ul style="list-style-type: none"> ・体落のときに声をもっと出したほうがいい (矯) ・もっと声を出して (矯) ・すりあげは脇をしめる (矯) ・足交差のときまた来るよ (その他) ・もっと技をかけろ (励)
B	6	<ul style="list-style-type: none"> ・足が曲がっているからまっすぐ足を2本刈る気でかけろ (矯) ・頑張れ (励) ・襟をちゃんと持って、投げる時にヤーと言う (矯) ・忘れた (その他)
C	1	<ul style="list-style-type: none"> ・すりあげを頑張れ (励)
D	8	<ul style="list-style-type: none"> ・足をさげないで背負投をして (矯) ・下を向かないで相手をずっと見て (矯) ・もっと引いてやって (矯) ・手首をもっと巻いて (矯) ・すりあげのときに手を内側にしろ (矯) ・すぐに技をかけろ (矯) ・右手を動かせ (矯) ・相手を動かしてもっと技をかけよう (矯)
E	4	<ul style="list-style-type: none"> ・すりあげがスムーズになったね (肯) ・先にかけて (矯) ・体落のとき、スピードをもっとつければいいよ (矯) ・すりあげは滑らかにスピーディーに (矯)

言葉の末尾につけた記号は、相互作用行動の種類を表す。

発問：(発)，肯定的フィードバック：(肯) 矯正的フィードバック：(矯) 否定的フィードバック：(否)，励まし：(励)

ここで子ども達の印象に残った言葉がけについて検討してみる。既出の表3にまとめられている相互作用行動をみてみると、22名が挙げた「最も印象に残った」声かけのうち、16 (72.7%) が矯正的フィードバックを挙げていた。矯正的フィードバックは最も多く発現した相互作用であり、回数が多く行われていることから子ども達においても印象に残りやすかったと推察できる。

IV. 結論

本研究では、体育授業以外のスポーツ活動場面における教師の相互作用行動について、「仙台大学柔道塾」を事例として取り上げ、事例

的に教師の相互作用行動を分析するとともに、それらの相互作用を子どもたちがどの程度認識し学びを得ているかを明らかにすることを目的とした。

本研究では以下の4点が結果として抽出された。

- ・教師らの相互作用行動総数は352回であった。
- ・フィードバックの総数は320回であり、このうち223回 (63.4%) が「矯正的フィードバック」であった。
- ・総フィードバックのうち、306回が「一般的フィードバック」であった。
- ・否定的フィードバックは発現しなかった。
- ・子ども達が「最も印象に残った」声かけは「矯正的フィードバック」であった。

以上の結果を見ると、仙台大学柔道塾では、非常に多くの相互作用行動が実施されていることがわかった。否定的なフィードバックは実施されておらず、子ども達の行動を肯定・矯正する指導が実施されていることが確認できた。しかしながら、子ども達は「矯正的フィードバック」を多く認知しており、自分たちの運動や思考が受け入れられたと考えている子どもは少数であった。そのことから、教師から子ども達に対する一方向的な、直接的な指導が中心になっている可能性も示された。このような課題を解決するためには、次の2点が重要となる。すなわち、「フィードバックに具体的情報または価値的内容を付加すること」、「肯定的フィードバックの割合を増やすこと」が挙げられよう。

仙台大学柔道塾は、仙台大学の事業として実施している。これは地域貢献の一環として行われている一方で、指導を担当する学生においては、将来地域の指導者として柔道を指導する際の指導力養成の場となっている。このような事実を踏まえると、仙台大学柔道塾における指導法の改善を図ることは、一層の地域貢献につながるのと同時に、将来の子ども達の学びを保障することにも間接的につながると考えられる。本研究のように、事例の積み重ねるとともに、定期的に仙台大学柔道塾の指導を見直す取り組みを通じて、地域と学生双方に有益な活動を目指していきたい。

注記

注1)

本研究では、“指導者”や“コーチ”を示す語として「教師」を用いている。本研究では体育科教育学領域の研究方法を援用するとともに、体育科教育学に関する文献を引用している。それらと用語を統一するために「教師」という語を用いた。

文献

- 深見英一郎 (2010) モニタリングと相互作用技術。新版体育科教育学入門, pp.90-97. 大修館書店: 東京,
- ダリル・シーデントップ・高橋健夫訳 (1988) 学習指導の実践。体育の教授技術, pp.231-266. 大修館書店: 東京,
- 高橋健夫・中井隆司 (2003) 教師の相互作用行動を観察する。体育授業を観察評価する, pp.49-52. 明和出版: 東京,
- 高橋健夫・岡澤祥訓・中井隆司 (1989) 教師の「相互作用」行動が児童の学習行動及び授業成果に及ぼす影響について。体育学研究, 34 (1): 191-200.
- 高橋健夫・長谷川悦示・浦井孝夫 (2003) 体育授業を形成的に評価する。体育授業を観察評価する, pp.12-15. 明和出版: 東京,

(2019年 5月28日受付)
(2019年 7月19日受理)